

国立国語研究所学術情報リポジトリ

いわゆる詠嘆・含蓄の「も」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): focus particle, topic, focus, scale 作成者: 畠山, 真一, HATAKEYAMA, Shin-ichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002056

いわゆる詠嘆・含蓄の「も」について

畠山 真一

(東京大学大学院)

キーワード

とりたて詞, トピック, フォーカス, スケール

要 旨

日本語の代表的なとりたて詞の一つである「も」には、さまざまな用法があることが知られている。この用法の中に、いわゆる「詠嘆・含蓄」を示すと言われる「も」の一用法が存在する。本論文は、この「詠嘆・含蓄」を示すと考えられている「も」の用法の本質的特性がどのようなものであるかを明らかにすることを目的としている。本論文では、この用法の「も」が、(1) 主題をマークし、(2) 話し手の予想外の事態に対する驚きを表現する文に出現する、という2つの特性を持つということが明らかにされた。さらに、本論文では、この2つの特性から、「詠嘆・含蓄」を表す「も」は、述語を焦点に取るということが導かれた。そして、この用法が、その他の「も」の用法が持つ特性を併せ持っているということが示された。

0. はじめに

日本語の代表的なとりたて詞の一つである「も」は、それが表現する意味の多様さによって多くの研究者の注意を惹いてきた(高橋, 1978; 田野村, 1991; 中西, 1993; 沼田, 1995; 定延, 1995; 畠山, 1996)。彼らの研究は、「も」の特性を様々な立場から論じているが、「も」の基本的な意味・用法を以下の3つのカテゴリーに大別するという点で一致している。

- (1) 類似した事態を前提とする用法。
- (2) スケールの影響で全称量化の意味合いを持つ用法。
- (3) 上記の2つとは明らかに異なった第三の用法。

以下順に説明していこう。

まず、(1)の「類似した事態を前提とする用法」の「も」がいかに分析されるかを、次の例文で説明する。

- (4) [駒子]Fも笑った。(「雪国」¹⁾)

(これ以降, []F で囲まれた部分は焦点 (focus) を表現する)

我々は、この文から次の2つの命題を導き出すことができる。

- (5) a. 駒子が笑った。
- b. 駒子以外の誰かが笑った。

(5a) は、主張 (assertion), (5b) は前提 (presupposition) と呼ばれる (Rooth, 1985; König, 1991)。この用法の「も」は、焦点「駒子」と連合することによって、以下のように規定される前提を生

み出すと分析される。

(6) 主張における焦点と、その焦点と対比されるオルタナティブ (alternative) とを入れ換えることによって得られる前提。

(5) を見れば明らかなように、(5b) は、焦点「駒子」と「駒子以外の誰か」というオルタナティブを入れ換えて得られた命題である。本稿では、このタイプの「も」を、包括的なとりたて詞の研究である König(1991)の用語法にならない、additive particle (以後、AP と略記) のモと呼ぶことにする。

続いて、(2) の用法について述べる。このタイプの用法は、スケールの影響で全称量化の意味合いを持ち、「さえも」で言い換えることが可能であるという特性を持っている。以下の例文をもとにこの用法について考えてみよう。

(7) 腰がすっかり曲ってしまって、[歩くの]F も大儀そうだ。(「楡家の人びと」)

我々は、上記の文の主節から次の2つの情報を引き出すことができる。

(8) a. 歩くことが大儀そうだ。

b. 歩くこと以上に負担がかかる動作はすべて、大儀そうだ。

(8a) は、(7) の真理条件を形成しているので (7) の主張である。これに対して、(8b) は、次の例文が示しているように「却下可能である」という性質を有している(沼田,1995)。

(9) 歩くことも大儀そうなのに、水泳は喜々としてやっている。

したがって、(8b) は、AP のモが生み出す命題と異なり前提ではない。この命題は、以下の3つの要素から推論された予想であると考えられる(畠山,1996)。

(10) a. 〈歩くこと、走ること、泳ぐこと、...〉といったスケール。

b. ある人が、何らかの動作を大儀だと感じたならば、その動作よりもつらい動作はすべて大儀と感じるだろうというヒューリスティクス。

c. 「歩くことが大儀そうだ」という主張。

この場合「も」は、スケールの力を借りることによって、(8b) で述べられている予想を引き出すと考えられる。さらに、この種の用法に付随すると言われる「意外性」のニュアンスは、主張によって談話参加者が事前に持っていた予想、例えば「歩くことは大儀ではない」が覆されることによって生じると説明することができる(Kay, 1990)。このような性質を持つタイプの「も」も、AP のモと同様に、König(1991)の用語法にならない、scalar additive particle (以後、SAP と略記) のモと呼ぶことにする。

最後に、(3) で述べられている用法について考えてみよう。以下の例文が示しているように、「も」には、AP のモとも SAP のモとも異なった第三の用法が存在する。

(11) お前も可哀そうな男だ。(「青春の蹉跎」)

(12) 図書館も昔に比べれば変ったものだ。(「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)

(13) ああ今年も僅かに成ったなあ。(「破戒」)

(11)-(13) で例示されるようなこの用法の「も」は、以下のような特質を持っていると考えられている(永野,1951; 寺村,1991)。

(14) 焦点となっている構成要素が何であるかがはっきりしない。

(15) 「も」が文の意味に、どのように寄与しているかがはっきりしない。

(16) 詠嘆性が感じられる。

すなわちこの第三のカテゴリーは、AP のモとも SAP のモとも異なった用法ということは明らかであるが、その表現効果の実体は何であるかを、「詠嘆・含蓄」といった曖昧な概念に依らずに述べるのが難しいカテゴリーなのである(永野,1951; 高橋,1978; 寺村,1991)。しかし、「も」の第三のカテゴリーを『詠嘆・含蓄性を表現する「も」』として説明してしまうと、その他の用法の「も」(AP のモ, SAPのモ)との関連性が見えなくなり、「も」の用法の統一的な理解への道が閉ざされてしまうという問題が生じる(田野村,1991)。

このような状況を打開するために、近年いくつかの提案がなされている(高橋,1978; 田野村,1991; 中西,1993; 定延,1995; 沼田,1995)。しかし、次節で示すように十分な議論がなされているとは言いがたく、未だこの「も」の第三のカテゴリーの理解は十分に得られているとは言えない。そこで本稿では、この「も」の第三のカテゴリーを暫定的に詠嘆のモと呼び、以下の考察を行う。

(17) a. 詠嘆のモの意味・機能に対する、より明確な性質付け。

b. 詠嘆のモと他の用法の関係の明示化。

1. 先行研究に見られる詠嘆のモの扱いと問題点

前節で述べたように、「も」には、AP のモとも SAP のモとも異なった用法、すなわち本論文において詠嘆のモと呼ばれる用法が存在する。この「も」の第三の用法は、先行研究において「含蓄をこめた文の主題提示」、「意外性を示す用法」、「一般的知識との類似を示す用法」などと呼ばれてきた用法と同じものである。この節では、先行研究において、本稿で言う詠嘆のモがどのように扱われてきたかを概観する。

1.1. 高橋(1978), 沼田(1995)

「も」の持つ意味・用法の包括的な記述を展開する高橋(1978)において、ここでいう詠嘆のモは、「含蓄をこめた文の主題提示」と呼ばれており、以下のような性質を持つとされている。

(18) a. 文の主題をマークする。

b. 焦点に対するオルタナティブがはっきりしない。

この主張を以下の詠歎のモを含む文で考えて見よう(以下の例文は、高橋(1978)の p.29から取った)。

(19) S村もとんだ姥捨山になったものよ。

高橋(1978)の分析に立てば、(19)に現れる「も」は主題である「S村」をマークしており、その「S村」に対比されるオルタナティブが何であるかがはっきりしていないと分析される。そして、彼の言う「含蓄」は、「主題に対するオルタナティブがはっきりしない」という意味で用いられている。

このように、彼は、永野(1951)、阪田(1971)の言う「主題提示」の機能と松下(1930)、佐久間(1940)の言う「不明確なものとの対比」という2つの機能を合わせ持った助詞として詠歎のモを性格付

けている。

高橋(1978)の主張に類似した枠組みとして沼田(1995)があげられる。彼女は、本稿で言う詠歎のモを「も₃」と名付け、次のような特徴を持っていると主張する。

- (20) も₃は、「不定な他者」の存在を暗示することで、話し手の考えている以上に多くのことを聞き手に他者として想定させたり、他者の想定自体を聞き手に完全に委ねてしまう(沼田, 1995, p.40)。

(20) に登場する「他者」という概念は、本稿のオルタナティブに当たる概念である。上の記述からわかるように、彼女の主張の骨子は、ほぼ高橋(1978)の言う「含蓄」と同じものであり、いわば高橋(1978)から主題に関する言及を取り除いたものと言える。

以上述べたような主張を、高橋(1978)は、豊富な実例をもとに実証的に展開している。しかし、彼の研究では以下のような点が明らかになっていないと思われる。

- (21) a. 「含蓄」という概念で意味されるものがはっきりとしていない。
b. 詠嘆のモが主題をマークするという主張には、これを示す証拠がほとんどあげられていない。
c. 主題をマークしかつ焦点をマークするという2つの相反する機能を詠嘆のモが担っていると想定されている。

まず、(21a) について述べる。先に述べたように、彼の言う「含蓄」という概念は、「焦点に対比されるオルタナティブがはっきりしない」という意味で用いられている。高橋(1978)のこの説明は、彼自身が述べているように、「はっきりしない」概念をもって詠嘆のモの意味・用法を説明しようとしたものであって、詠嘆のモの意味・用法を明確にしたものではないのである(高橋, 1978, p.28)。当然この不明確さは、高橋(1978)の含蓄概念に類似した意味規定を採用している沼田(1995)にも当てはまる。

続いて(21b) について述べる。高橋(1978)が「詠嘆のモは主題をマークする」という観察の証拠として上げているのは、詠嘆のモが「構文的に主語、題目語になるものがほとんどだ」(高橋, 1978, p.27)という部分のみである。しかし、「構文的」な性質以外にも、主題(題目)が有している性質は数多く存在する(Lambrecht, 1994; 野田, 1996)。したがって、「詠嘆のモが主題をマークする」と主張するためには、より詳細な吟味が必要である。

最後に(21c) について述べる。高橋(1978)の説明では、詠歎のモは主題でありかつ焦点であるような名詞をマークする助詞である、ということになる。しかし、詠歎のモが焦点をマークしていないということを示す証拠が存在する。

詠嘆のモがマークしている名詞句が焦点ではないということは、焦点を明示的に指定する構文である疑似分裂文を使って確かめることができる。良く知られているように、疑似分裂文「Aのは、Bだ」において、焦点はBの位置を占める(砂川, 1995)。よって、疑似分裂文を用いることによって、焦点がどの構成要素であるかを明確にすることが可能である。例として、次の文を考えてみよう。

- (22) 太郎は、洋服も買った。

この文は、焦点が名詞句「洋服」である読みが一般的であるが、次のような文脈をつけることによって、動詞句を焦点とする読みも可能になる。

(23) 太郎は、フランス料理店でおいしい食事をとった。その後、洋服も買った。

この場合、対比されているのは「洋服を買う」という動詞句の部分である。したがって、(22) は焦点に関して曖昧な文ということができる。しかし、「洋服も」を疑似分裂文の焦点の位置に入れた次の文は、名詞句「洋服」を焦点とする読みしか存在しない。

(24) 太郎が買ったのは、洋服もだ。

このように、疑似分裂文は焦点がどの構成要素であるかを明示する機能を持っている。よって、詠嘆のモによってマークされる名詞句が焦点ならば、詠嘆のモを含む次の文を疑似分裂文にしてもほとんど意味は変わらないはずである（以下の例文は、高橋(1978)の p.29から取った）。

(25) かう降っちゃ猿もねぐらに引込んでるだらう。

しかし、上の文を疑似分裂文に置き換えた次の文に現れる「も」には AP のモもしくは SAP のモの解釈しか存在しない。

(26) かう降っちゃねぐらに引込んでるのは猿もだらう。

この観察から、詠嘆のモは焦点をマークしていないということが導かれる。よって、詠嘆のモが主題でありかつ焦点であるような名詞句をマークする、という彼の主張については検討の余地がある。

1.2. 田野村(1991), 中西(1993)

田野村は、松下(1930)、高橋(1978)、寺村(1991)による詠嘆のモの記述を曖昧であると批判し、詠嘆のモを、SAP のモの一種である、意外性を表現する用法と規定した。例えば以下の例において、a は b に言い替えられると彼は主張する。

(27) a. 俺も年だなあ。

b. 若い若いと思っていた俺も、年だなあ。

(28) a. 結婚式も終りに近付きました。

b. まだまだ終らないと思っていた結婚式も終りに近付きました。

このような直観を基に、彼は詠嘆のモに対して次のような特徴付けを与えている。

(29) あらかじめ話し手の何らかの予想や思い込みがあって、それに反する事態を述べるのに使われている(田野村, 1991, p.84)。

つまり、意外性を示す、という機能こそが詠嘆のモの機能であると田野村(1991)は考えている。そして、(29) で述べられている「話し手の何らかの予想や思い込み」は、本稿で言う SAP のモと同様にスケールから導かれると彼は主張している。

以上述べてきたように、田野村(1991)は高橋(1978)の持つ「詠嘆のモに対する意味規定の不明確さ」という問題点をクリアすることを目的とした優れた研究であると言える。さらに、(27)、(28)での言い替えが自然なことから、「意外性」という概念によって詠嘆のモを特徴付けるのは正当な試みのように見える。しかし、彼の主張には以下のような問題があると考えられる。

(30) a. 詠嘆のモがSAPのモの一種ならば、詠嘆のモがマークしている名詞句は焦点ということになるが、実際はそうではない。

b. (29) とまでは言えない。すなわち、「予想」がなくても、詠嘆のモは出現しうる。まず (30a) であるが、これは高橋(1978)が持つ問題点の内の一つと同じである²。前節で見たように、詠嘆のモが焦点をマークしていると考ええると、対応する疑似分裂文はほぼ同じ意味を表現するはずである。しかし、この意味の対応は成立せず、疑似分裂文に現れるモには AP のモもしくは SAP のモの解釈しかない。したがって、詠嘆のモが SAP のモと同じように焦点をマークしているとは考えられない。続いて (30b) で示されている問題点を述べる。以下の例を考えてみよう。

(31) ほほほほ、おまえさんも、どっか、おとつつあんに似たところがあるね。(「路傍の石」)
上の文は、話者が父親を尋ねて突然現れた「路傍の石」の主人公「吾一」に初めて会ったときに発せられたものであり、発話時以前に「この子は、父に似ていない」という予想を持っていたとは考えられない。ただし、田野村の言う「意外性」は確かに (31) から感じることができる。よって、(29) で述べられている説明は言いすぎであるとしても、少なくとも詠嘆のモが意外性を示すということは正しいと思われる。

この田野村(1991)の立場に近い論者として、中西(1993)がいる。彼女は本稿で詠嘆のモと呼んでいる用法を、「対極暗示」と「[領域] も [段階]」の2つに下位分類して論を進めている。彼女の「対極暗示」という概念は、田野村(1991)の「意外性」とほぼ同じ概念と考えられる。もう一つの下位カテゴリーである「[領域] も [段階]」は、「夜もふけてきました」に代表されるようなカテゴリーであり、下位段階を持ちうる時間的な領域の中で、その下位段階が達成されたということの意味する。例えば、「夜もふけてきました」という文は、下位段階「夕方、夜更け、丑三刻、夜明け前…」の中に含まれる「夜更け」という段階が達成されたということの意味する。彼女の議論の基本的な部分は田野村(1991)に依拠していると考えられるので、先に述べた田野村(1991)の問題点はそのまま、彼女の主張にも当てはまると思われる。

1.3. 定延(1995)

定延(1995)は、本稿で詠嘆のモと呼んでいるカテゴリーに対して、認知的プロセスという観点から分析を加えている。

彼の分析によれば、すべての「も」の用法は、「類似事態が存在すること」を示すとされ、詠嘆のモも例外ではないと分析されている。一見「類似事態が存在している」ようには見えない詠嘆のモに対して、彼は、以下のような意味で類似事態が存在すると主張している。

(32) 一般的抽象的知識との類似を示す(定延, 1995, p.232-233)。

彼の主張を以下の例を用いて説明しよう (以下の(33-34)は、定延(1995)の p.234から取った)。

(33) a. 夜もふけてまいりました。

b. 世の中、時間が経つのは速いものだ。

(33a) に現われている詠嘆のモは、この文の主張である「夜が更けて来た」と (33b) で表現される一般的知識が類似しているということを表現しているとされている。ここで、彼の言う「類似」

は、「具体例が一般的知識を支持する（一般的知識が正しいということの証拠である）」という関係を意味している。もう一つ例をあげよう。

- (34) a. しかし、坂田もバカなことを言ったもんだね。
- b. 世の中、バカが多いものだ。

(34a) に出現する詠嘆のモは、(34b) の一般的知識との類似を表すとされている。

ここまでの説明で明らかのように、彼は、「類似」という概念を「一般的知識を支持する」という概念にまで拡大し、詠嘆のモを説明している。この主張は、「も」の意味・用法を「類似性」と言う概念で統一的に説明しようとしたもので、その提案自体は非常に興味深いものと思われる。しかし、詠嘆のモの意味記述として彼の論述を見た場合、以下 (35) で述べるような不十分な点がある。

(35) 明らかに AP のモと解釈されるべき「も」の用法も、詠嘆のモとして分類されてしまう。例として以下の文を考えてみよう。

- (36) 僕も歩いた。
- (37) 日曜は水族館も混んでいた。

この2つの例を、それぞれ以下の一般的知識を支持する具体例と見なすことに、何ら問題はない。

- (38) 人間は歩く動物だ。
- (39) 日曜は、どこも込み合うものだ。

したがって、定延(1995)の説明でいけば、(36) と (37) に出現する「も」は詠嘆のモと解釈されねばならないが、実際は AP のモの解釈しかない。同様に、ほとんどどんな文についても一般的知識を指示する具体例として解釈することは可能である。よって、彼の主張によれば、ほとんど全ての「も」の現れを詠嘆のモとして解釈しなければならないということになる。

2. 詠嘆のモとは何か？

前節において、先行研究がどのように詠嘆のモを扱っているかを概観し、どの研究にもいくつかの不十分な点があるということを指摘した。つまり、0 節で述べたように、「詠嘆のモ」というカテゴリーがどのような意味・用法を持ったカテゴリーであるかは、依然として判然としていないのである。

本節以降、先行研究をふまえた上で、詠嘆のモの分析を提示する。本論文で得られる結論を先取りして言えば、詠嘆のモは以下の性質を持つとりたて詞ということになる。

- (40) a. 詠嘆のモは、主題をマークする。
- b. 詠嘆のモを含む文は、下の命題が、発話時における話し手の予想外の発見であることを示す。
 - 述語により表現される属性が主題の指示対象に帰属する。
- c. 詠嘆のモを含む文に出現する述語は、話し手が既に主題への帰属を行っている述語の集合に追加され、その集合の要素と対比される。よって、詠嘆のモは述語を焦点として取る。

(40a) は、高橋(1978)が既に指摘していた点であるが、彼はこの主張に対して十分な証拠を提示していない。そこで、3 節で、彼の主張を検討する。(40b) は、田野村(1991)、中西(1993)がそれぞれ「意外性」、「対極の暗示」と呼んで既に言及していた性質である。本論文では、4 節において「予想外の発見」のより詳細な性質を明らかにする。最後に、(40c) について述べる。5 節において、この性質を詠嘆のモが持つという主張が、(40a,b) からの自然な帰結であることを示す。

(40) の各項目の検討に入る前に、一つだけ本論文の用語法について述べておく。(40b,c) において「述語」という用語が用いられているが、この用語は、本論文において以下の意味で用いられる。

(41) いわゆる「主題-解説」構造における解説部分を、本稿では述語と呼ぶ。したがって、「トイレは私たちがきれいにします」という文における「私たちがきれいにします」は、本稿の用語法に従えば「述語」となる。

それでは、(40) の各項目を順に検討して行こう。

3. 詠嘆のモと主題

ここでは、高橋(1978)で十分な吟味がなされていなかった、詠嘆のモは主題をマークするという主張の妥当性を検証する。

1.1 節で既に言及したように、詠嘆のモがマークしている名詞句はすくなくとも焦点ではない。したがって、詠嘆のモがマークしている名詞句は、(1) 主題、(2) 主題でも焦点でもない名詞句という 2 通りの可能性がある。本節では、詠嘆のモが主題をマークするという主張に対する積極的な証拠を提示する。

主題という概念は、論者によって様々な意味を持つ (Lambrecht, 1994)。したがって、「詠嘆のモが主題をマークする」というためには、前もって主題という概念にどのような定義を与えるかという点を明らかにしておかねばならない。本稿では、主題に対し以下の定義を与える。

(42) 文 S の構成要素 T が主題であるのは、次の条件が満たされた時、その時に限る

(Lambrecht, 1994; 益岡・田窪, 1991; 野田, 1996)。

- T の指示対象が、談話参加者によって特定可能である。
- 文 S によって表現される命題は、T についての命題と談話参加者に見なされる。
- 談話参加者は、S を読む・聞くことによって T についての知識が増大する。

このような定義のもとに、詠嘆のモが主題をマークするという観察を次の 2 つのステップで検討する。

(43) 詠嘆のモを含む文には、主題が存在する。

(44) 詠嘆のモは、主題をマークする。

まず、(43) から考えよう。これは、「その場で知覚したできごとをそのまま表す述語を含む文には主題が存在しない」という野田(1996)の報告から、詠嘆のモを含む文に主題が存在するという観察を確かめることができる。このような述語には、「見える」、「聞こえる」、「来る」などがあるが、以下の例文が示しているように、これらの述語と詠嘆のモは共起しない。

- (45) a. そのうちに原田の女房も来た。(「護持院原の敵討」)
- b. 秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も見える。(「野菊の墓」)
- c. 「御車を」という声も聞こえる。(「新源氏物語」)

(45a-c) に現われている「も」には、詠嘆のモの解釈は存在しない。したがって、この現象は「詠嘆のモは主題を持たない文に出現しない」ということを示している。この現象は、決定的ではないものの「詠嘆のモを含む文には主題が存在する」ということを示唆していると考えることができる。

続いて、(44) で述べられている「詠嘆のモは主題をマークする」という観察について考える。理論的に言えば、詠嘆のモを含む文の主題として、「詠嘆のモにマークされた名詞句」、「その文の述語」の2通りの可能性がある(野田,1996)。本稿で、「詠嘆のモにマークされた名詞句」が主題であると考える理由は、以下の4つである。

- (46) 述語を主題化した疑似分裂文に出現する「も」には、詠嘆のモの解釈が存在しない。
- (47) 詠嘆のモは、談話参加者にとって未知の対象を指す名詞句には付かない。
- (48) 我々は、詠嘆のモにマークされる名詞句の指示対象について知識が増大するとみなすという直観を有する。
- (49) 詠嘆のモは、文の主語として現われる(高橋,1978)。

まず、(46) を、以下の文を例にとって考えよう。

- (50) あんたも変った人だな。(「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)

仮に、詠嘆のモを含む文において主題が述語部分ならば、(50) の述語を主題化して得られる次の疑似分裂文は、(50) と同様の意味を表現するはずである。

- (51) 変わった人はあんたもだな。

しかし、先に議論したように疑似分裂文化した方に現われる「も」は、詠嘆のモとは解釈できない。この現象は、詠嘆のモを含む文において、述語が主題ではないことを示している。

次に(47) について考えよう。次の例文が示しているように、詠嘆のモは、未知の対象を指す名詞句をマークすることができない。

- (52) a. ある結婚式も終りに近付きました。
- b. 一人の女も結構やるものだね。

上記の例文に出現する「も」を詠嘆のモとして解釈することはできない。(42) で述べたように、主題は特定名詞でなければならないという特性を持っている。したがって、この現象は、「も」によってマークされる名詞句が特定名詞でないため、詠嘆のモの読みを持たないと説明することができる。よって、この現象も詠嘆のモが主題をマークするという本稿の主張を支持している。

続いて、(48) について考えよう。先の「あんたも変った人だな」という文に関して、我々は、「あんた」に関して知識が増大すると見なすだろうか、それとも、「変った人」に関して知識が増大すると見なすだろうか？ 我々は、前者の直観を有していると考えられる。すなわち、『「あんた」に「変わった人だ」という性質が帰属される』という読みの方が直感に合致する。ここからも、詠嘆のモが主題をマークすることが示唆される。

最後に、(49) に関して述べる。野田(1996)、Vallduví(1992)によれば、基本語順において前の方にあるものほど主題になりやすいということが知られている。筆者の手持ちの例の中で詠嘆のモが主格以外の格を取っている用例は、160例中3例のみである。この観察は、詠嘆のモが主題をマークするということを示唆している。

以上4つの理由から、本稿では、詠嘆のモが主題をマークすると考える。

4. 詠嘆のモと予想外の発見

本節では、2節の(40b)で述べた「詠嘆のモを含む文は、発話時における話し手の予想外の発見を示す」という主張を検討する。

4.1. 詠嘆のモと「ものだ」の共起関係

田野村(1991)の主張である「詠嘆のモを含む文からは意外さが感じられる」という主張は、言い換えの妥当性という点だけではなく、ムード表現「ものだ」との共起関係からもその正当性を確認することが可能である。寺村(1984)によれば、「ものだ」には「当為」や「追想」といった用法に加えて「驚き」を示す用法が存在する³。このような用法を持つ「ものだ」は、詠嘆のモと共起した時、次の用例が示すように「驚き」を示す「ものだ」という解釈しか存在しない。

- (53) a. 図書館も昔に比べれば変わったものだ。(「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
b. 親切な人もあるものだ。(「黒い雨」)
c. しかし、貴様も大きくなったものだなあ。(「破戒」)

この観察は、田野村(1991)の観察を支持している。

4.2. 予想外の(再)発見

ここまでの議論から、詠嘆のモを含む文からは意外性が感じられるということがわかった。続いて、意外さを感じる状況にはどのようなものがあるか、という問題を考えてみよう。我々が命題Pに対して意外さを感じる状況には、少なくとも次の3種類があると思われる。

- (54) a. Pを発見したことによって、過去に持っていた信念が完全に誤っていることが判明し、その信念が棄却される場合。
b. Pを発見することによって、それまでに保持していた信念から導かれる予想が棄却される場合。
c. 既に十分な予備知識を持っている対象に、Pにより表現される予想も出来なかった性質が帰属するということを発見、もしくは再発見した場合。

(54a) は、例えば、人づてに「田中さんは女だ」という話を聞いて、その信念を保持していたが、実際に田中さんに会って、「田中さんは男だ」という認識に至り、過去の信念を棄却した場合に生じるような意外性である。(54b) は、次のような場合に生じる意外性である。太郎という人物が以下の信念を持っているとしよう。

- (55) 花子はいつも待ち合わせの場所に時間通りに現われる。

そして太郎が花子と東京駅で待ち合わせをしたと仮定しよう。すると、太郎は以下の予想を持っているであろう。

(56) 花子は東京駅に待ち合わせの時間に現われる。

この時、太郎が待ち合わせの時間に東京駅に行き、「花子がいな^い」という認識を得ることによって(56)が棄却されたとする。この時に太郎が感じる意外さが(54b)のタイプの意外性である。最後の(54c)は、例えば、「自分が住んでいる町に昔はお城があった」ということを初めて知った時に生じる「へえー、お城があったんだあ」という意外さである。言い換えれば、手持ちの知識からは予想できなかったことを発見した場合に感ずる意外さがこのタイプである⁴。最後に(54c)の再発見の場合について述べる。このタイプの意外性は、何らかの要因(忘れていた、考えていなかった)によって利用不可能になっていた命題Pに、改めて気づかされる場合に生じる驚きである。例えば、バターの方がマーガリンよりも好きな人が、何の気なしにマーガリンを購入し食べてみて、「ああ、やっぱり私はバターの方が好きなんだあ」ということに改めて気づく時に感じる驚きがこのタイプである。

上で述べたように、意外性が感じられる状況には少なくとも3つのタイプがある。しかし、詠嘆のモを含む文により表現される意外性が、この3つのタイプのすべてを網羅しているわけではない。具体的には、以下の文の非許容性から、(54a)に当てはまるタイプの意外性を表現する文に詠嘆のモは出現しないことが理解される⁵。

(57) a. 会社員だと思っていたのに、彼も学生だなあ。

b. 男だと思っていたのに、高橋さんも女だなあ。

c. 木製だと思っていたけど、この椅子もプラスチック製だなあ。

上記の例はすべて、なんらかの信念(思い込み)が完全に否定されることを発見し、発話時以前に保持していた信念(思い込み)が棄却されたことを表現する文であるが、これらの文中に生起するモを詠嘆のモとして解釈することはできない。したがって、(54a)のタイプの意外性を表現する文中には詠嘆のモが出現しないということがわかる⁶。

一方、(54b,c)のタイプの意外性を表現する文中には詠嘆のモは生起することができる。まず、(54b)から考えてみよう。以下の例文は、(54b)のタイプの意外性を表明している文に詠嘆のモが出現した例である。

(58) a. 「さて、夜も更けました」といって旅僧は又語^{かたりだ}出した。(「高野聖」)

b. もう紅葉もおしまいね。(「雪国」)

上記の例文が示しているように、中西(1993)の言う「[領域]」も「[段階]」タイプの詠嘆のモは、(54b)のタイプの意外性、特に、スカラー含意と呼ばれる予想の一種が棄却されることにより生じる意外性を表現する文に出現する。言い替えれば、このタイプの詠嘆のモは、述語部分にスカラー表現を持った文に出現する。以下、スカラー含意の棄却によってどのように意外性が生じるかについて論じる。

(58)に現れている詠嘆のモの場合、詠嘆のモによってマークされる主題が指す対象に帰属される述語は、スケールの一部をなすと考えられる。例えば、(58a)の場合、以下のようなスケール

を考慮することが可能である(中西,1993)。

(59) 〈宵の口だ、半ばだ、更けた〉

そして、(58a)を発話する以前には、以下の信念を持っていたと思われる(田野村,1991)。

(60) 夜はまだ半ばだ。

そして、スカラー含意は以下の定義における $S(E')$ のことを言う⁷。

(61) a. 言語表現が何らかの基準によって半順序 \leq_s をなす。

b. その半順序上のどこかに位置する表現 E を含む文 $S(E)$ から、 E よりも上位の表現 $E'(E \leq_s E')$ を含む文 $S(E')$ の否定を、Grice(1975)の言う量の公準から導くことができる(Hirschberg,1985 ; Levinson,1983)。

したがって、(60)のスカラー含意である次の命題を、(58a)を発話する以前に話し手が予想していたということが導かれる。

(62) 夜は更けていない。

(58a)の場合、このスカラー含意が、詠嘆のモを含む節の主張「夜が更けた」により棄却されている。すなわち、話し手が発話時において「夜が更けていた」という事実を発見し、この発見によってスカラー含意が棄却される。このスカラー含意の棄却プロセスこそが、今論じているタイプの詠嘆のモを含む文から感じられる「意外性」を生んでいると考えられる。同様に、(58b)に関しても、以下のようなスカラー含意が主張により棄却されることによって意外性が生じると考えられる。

(63) 紅葉はまだ終わらない。

本論文では、この種の文に出現する詠嘆のモを、中西(1993)とは異なり、「スカラー含意棄却型」の詠嘆のモと呼ぶ。これは、スカラー含意の棄却こそが、このタイプの詠嘆のモの本質と考えるためである。

続いて(54c)タイプの意外性について考えてみよう。以下の(64)は、予想もしなかった出来事を見出すことによる意外さを表現し、(65)は、再発見による意外さを表現する文に詠嘆のモが現れた例である(ただし、(65b)で問題になるのは、アンダーラインが引かれた「も」である)。

(64) a. お前も可哀そうな男だ。(「青春の蹉跌」)

b. カトリックも、存外便利なところがあるようだ。(「かよい小町」)

(65) a. やっぱり、忠平さんも他人やった。(「越前竹人形」)

b. やはりこの若者も男であったかなどと思いながらもその一方で七瀬は、考えていることとはうらはらに口では何も言えず黙りこんでしまった彼の純真さをやや哀れに感じた。(「エディプスの恋人」)

(64a)の場合、充分に予備知識を持っている「お前」に対して、手持ちの知識からでは予想ができなかった「可哀想な男だ」という性質が帰属されるということを見出すことによって生じる意外性である。(64b)に関しても同様に、「便利なところがある」という予想もしなかった性質が帰属されるということに気づいたことによる意外さが表現されている。対して、(65a)の場合、「やっぱり」が現れていることから、「今まで知らなかった(予想もしなかった)性質が帰属されているこ

とを発見した」ことによる意外性を表現しているとは言えない。しかしこの場合も、(64)と同じように、発話時近傍において「忠平さん」に「他人だ」という性質が帰属されるという知識は利用不可能であり、それゆえこの命題の成立は発話時においては予想できなかった、とすることができる。そして、この発話時近傍において予想できなかった性質が「忠平」に帰属されるということを再発見した（再び気づいた）ことによって意外さを感じたのだ、と説明することができる。(65 b) も同様に、「この若者」に「男だ」という発話時における予想外の性質が帰属されるということを再発見した（再び気づいた）ことによる意外さが表現されていると考えられる。

この種の詠嘆のモは、今まで知っていた主題の性質の集合に、述語により表される予想できなかった性質が付加される、ということ表現する文に出現することが基本的である。この性質から、本論文では、このタイプの詠嘆のモを、「属性追加型」の詠嘆のモと呼ぶ。

ここまでの議論から、詠嘆のモは田野村(1991)の以下の観察よりも広い環境で生起することがわかる ((29) を再録)。

(66) あらかじめ話し手の何らかの予想や思い込みがあって、それに反する事態を述べるのに使われている (田野村, 1991, p.84)。

すなわち、詠嘆のモは、意外性が生じる3つのタイプの状況の内、スカラー含意という予想が裏切られるような事態を表現する文に加えて、発話時近傍において予想することができなかった性質が主題に帰属されることを表現する文にも出現することができる。「予想の裏切り」と「予想もできないこと」をまとめて、「予想外」と呼ぶことにすると、詠嘆のモは意外性を表現する文の中でも特に、「話し手の予想外の事態の(再)発見」を表現する文に出現すると言える。

このように考えることで、1.3 節で問題になっていた以下のような文に詠嘆のモが出現しないことが説明できる。

(67) 僕も歩いた。

(68) 日曜は水族館も混んでいた。

田野村(1991)が既に指摘しているように、これらの文が述べている事態は、一般的な知識から十分に予想可能な事態について述べているが故に、このような事態に対して意外性を感じることは難しい。これが、(67)、(68)に詠嘆のモが出現しない理由であると考えられる。さらに、野田(1995)、定延(1995)による「詠嘆のモを含む疑問文、命令文の許容性が低い」という観察に関しても、本節で得られた結論からうまい説明を与えることができる。まず、以下の疑問文、命令文を見てみよう。

(69) a. おまえも大きくなったの？

b. お前も大きくなれ。

これらの文に出現する「も」には、彼らが指摘するように詠嘆のモの読みはない。これは、詠嘆のモが予想外の事態の発見に起因する意外さを表現するという本節の結論から簡単に説明することができる。なぜならば、詠嘆のモが出現する文が表現する出来事は、発話時において既にその成立が発見されている事柄であるから、そのような事柄に対して疑問や命令といった言語行為を行うことはナンセンスと考えられる⁸。

4.3. 詠嘆のモ、予想外の（再）発見、主題

ここまでの議論から、詠嘆のモが「発話時における（再）発見」を示す文中に生起するということが明らかになった。さらに、3節での議論から、詠嘆のモが主題をマークするという性質を持っているということが示されている。この2つを考え合わせると、以下のような結論が導かれる（(40b)を再録）。

(70) 詠嘆のモを含む文は、下の命題が、発話時における話し手の予想外の発見であることを示す。

- 述語により表現される属性が主題の指示対象に帰属する。

この主張を、以下の文を使って説明してみよう。

(71) しかし兄も気の毒よ。（「友情下篇」）

この文の主題は、3節での議論により「兄」である。そうすると、(71)は以下の命題内容を表現しているということになる。

(72) 主題「兄」に性質「気の毒だ」が帰属する。

さらに本節での議論から、この文が表現している命題は、話し手が発話時に（再）発見した・気づいた予想外の事態（状態）を表現している。このように、詠嘆のモは、主題への予想外の性質の帰属の（再）発見を表現する文に主題マーカ―として出現すると言える。

5. 詠嘆のモ、焦点、追加性

前節の議論から、詠嘆のモは以下の性質を持つことが示された。

(73) 詠嘆のモを含む文は、下の命題が、発話時における話し手の予想外の発見であることを示す。

- 述語により表現される属性が主題の指示対象に帰属する。

さらに、「どのように予想外なのか」という観点から詠嘆のモが「スカラー含意棄却型」と「属性追加型」の2タイプに下位分類されるということも示された。本節では、ここまでの結果から以下の性質を詠嘆のモが持つことが自然な帰結として導かれるということを主張する。

(74) 詠嘆のモは、述語を焦点として取る。

以下、「スカラー含意棄却型」、「属性追加型」の順に、詠嘆のモが(74)で述べられている性質を所有しているかどうかを検討する。

まず、「スカラー含意棄却型」について考える。このタイプの詠嘆のモは、以下のように述語部分にスカラー表現を持った文に出現する（以下の例文は、(58)の再録である）。

(75) a. 「さて、夜も更けました」といって旅僧は又語出した。（「高野聖」）

b. もう紅葉もおしまいね。（「雪国」）

ここで確認しておくべきなのは、スカラー含意棄却型の詠嘆のモを含む文により表現される主張は、詠嘆のモでマークされる主題が指す対象の過去の状態を参照しなければならない、という点である。これは、述語が表現している段階の達成を発見するためには、それ以前の段階との対比が必須となるためである。例えば、(75a)における「更けました」の部分は、同一スケール上の

別の段階、「宵の口だ」、「半ばだ」といった言語表現と対比され、主題に述定されていると考えられる。つまり、「更けました」という述語は、「宵の口」でもない、「半ば」でもない、「更けた」時点である、という対比を潜在的に持ちながら、「夜」を述定していると考えられる。

このように考えると、スカラー含意棄却型の詠嘆のモが、述語を焦点として取ると考えることは、至極自然な考えとなる。焦点は、「文中でオルタナティブと対比される部分」と規定されているため(König, 1991; Rooth, 1985, 1992), 以前の段階というオルタナティブと対比される部分, すなわち述語部分が焦点となるのである。

続いて、属性追加型の詠嘆のモについて考えよう。このタイプの詠嘆のモは、以下のような例文に出現する(以下の例文は、(64), (65)の再録である)。

(76) a. お前も可哀そうな男だ。(「青春の蹉跌」)

b. カトリックも、存外便利なところがあるようだ。(「かよい小町」)

(77) a. やっぱり、忠平さんも他人やった。(「越前竹人形」)

b. やはりこの若者も男であったかなどと思いながらもその一方で七瀬は、考えていることとはうらはらに口では何も言えず黙りこんでしまった彼の純真さをやや哀れに感じた。(「エディプスの恋人」)

そして、この種の詠嘆のモは、以下のような意外さを表現する文に出現する。

(78) 既に充分な予備知識を持っている対象に、Pにより表現される予想も出来なかった性質が帰属するということを発見、もしくは再発見したことに起因する意外性。

ここで問題になるのは、「既に充分な予備知識を持っている対象」の部分である。この「対象」に関する「予備知識」はどのように表現できるだろうか？ 自然言語においてこの種の予備知識は、その「対象」を主題として持つ文の集合によって表現されると考えられる(Vallduví, 1992)。例えば、(76a)における「お前」に関する予備知識は出典である「青春の蹉跌」を見ると、「お前」を主題として持つ以下のような文の集合として表現される。

(79) お前は、学生だ/お前は、法律を勉強している/お前は現実主義者だ...

言い替えれば、(76a)は、(79)の文集合を背景に発話される文であるということになる。

すると、(76a)の述語部分「可哀想な男だ」は、(79)の述語部分「学生だ」、「法律を勉強している」等と対比されている(オルタナティブとしている)、と考えるのは自然な結論である。つまり「可哀想な男だ」という述語は、今まで良く知っていた性質「学生だ」、「法律を勉強している」、「現実主義者だ」と潜在的に対比されながら、「お前」に述定されていると考えられるのである。同様の説明を(76b)に対しても与えることが可能である。したがって、スカラー含意の棄却を表現する詠嘆のモと同様に、この場合の詠嘆のモも述語部分を焦点として取るということが結論される。

(76a,b)の場合は、主題に関する予備知識の中に詠嘆のモを含む文により表現される情報が含まれていなかったが、(77a,b)の場合は、既に含まれていると考えられる。しかしこの点を除けば、(77a,b)の例も(76a,b)の例と同様な説明を与えることが可能である。したがって、この場合も述語部分が焦点となると結論できる。

ここまでの議論から、スカラー含意棄却型の詠嘆のモの場合も属性追加型の詠嘆のモの場合も、共に、話し手が所有する主題に関する既成知識が参照されるということが明らかになった。また、4.3節で述べたように、詠嘆のモを含む文は以下のような話し手の発見による意外性を表現する。

(80) 詠嘆のモを含む文は、下の命題が、発話時における話し手の予想外の発見であることを示す。

- 述語により表現される属性が主題の指示対象に帰属する。

これと本節での議論から以下が帰結する。

(81) 詠嘆のモは、主題が指す対象が持っている話し手が信じている属性の集合に、話し手が新しい属性を追加した、ということを示す。

スカラー含意棄却型の場合は、この属性の追加によって予想（スカラー含意）が棄却され、これによって驚きが生じる。対して、属性追加型の場合は、少なくとも発話時には予想もつかなかった属性を主題が有しているということを(再)発見することで驚きが生じると考えることができる。

(81) で述べている詠嘆のモの性質を定延(1995)の言う類似性という概念と結びつけて解釈することも可能である。本節で得られた結論を類似性という概念を用いて言い換えると以下になる。

(82) 詠嘆のモが示している類似性は、定延(1995)が述べているような「一般的知識との類似」ではなく、むしろ、「主題に関する既成知識との類似」である。

つまり、(81) で述べている「主題が指す対象が持っている話し手が信じている属性の集合」、すなわち、主題に関する既成知識は、「同一の主題を持つ」という点で、詠嘆のモを含む文が表現する事態と類似性を有すると考えられる。

6. 「も」の意味的地図

本節では、詠嘆のモとその他の用法の関連について述べる。

4 節での議論によって、詠嘆のモはスカラー含意棄却型と属性追加型という 2 つの下位分類を持つことが明らかになった。この 2 つの下位分類は、両者ともに、詠嘆のモがマークする主題に関する既成知識を参照しながら、述部を焦点として述定している。言い替えれば、前節の (81) で述べたように、発話時以前に主題に帰属されている性質の集合に、詠嘆のモを含む文の述語により表現される性質が追加されるということを表現する。この「追加」という性質は、AP のモも同様に持っていると考えられる。これを以下の文を例にとって考えてみよう。

(83) 野島も亦そんな気がした。(「友情」上篇)

上記の例文は、以下のように言い替えることが可能である。

(84) 他の誰かに加えて、野島も亦そんな気がした。

つまり、この追加性という点で AP のモと詠嘆のモは共通点を持つ。

さらに、発話時以前にトピックに帰属されていた性質で形成される文集合は、却下することが不可能なため AP のモにおける「前提」と同様の役割を果たしていると言える。

また、4節において、詠嘆のモを含む文からは「意外性」が感じられる、という観察を述べた。「も」が含まれた文から「意外性」が感じられるという性質は、SAPのモと詠嘆のモに共通の特性である。また、詠嘆のモの下位分類であるスカラー含意棄却型は、「スカラー含意が棄却される」という性質を持っているが、この特性はSAPのモと同様のものである。この2点で、詠嘆のモはSAPのモと関係を有している。

ここまで、詠嘆のモがAPのモ、SAPのモとどのような性質を共有しているかを見たが、詠嘆のモは、それ独自の性質も勿論持っている。3節で述べているように、詠嘆のモは主題をマークするという性質を持っている。この特性は、APのモにもSAPのモにもない、この用法独自の性質と言える。

本節で述べてきた詠嘆のモとその他の用法の関係を表にすると以下のようにまとめることができる。

(85)		APのモ	SAPのモ	詠嘆のモ
	追加性	○	○	○
	前提	○	×	○
	意外性	×	○	○
	スカラー含意棄却	×	○	○
	主題をマークする能力	×	×	○

上記の表から見て取れるように、詠嘆のモはAPのモが持つ性質、SAPのモが持つ性質を合わせ持ち、さらに、主題をマークするという特質をもった「も」の一用法であると結論づけることが可能である。

7. 終りに

本稿では、今まで記述およびその位置づけが不明確であった「も」の一用法を詠嘆のモと呼び、その意味・機能を明らかにした。しかし、残された課題も数多く残っている。ここでは、最も重要と思われる次の2点についてのみ述べる。

まず問題になるのが、日本語の代表的な主題マーカである「は」と詠嘆のモがどのように異なっているか、という問題である。松下(1930)は、この2つの主題マーカの違いを、「は」は分説、「も」は合説という言葉で表現しており、この理解は基本的に正しい方向を向いていると筆者には感じられる⁹。しかし、この問題に関しては、より実証的・理論的な研究が必要である。

もう一つの問題は、歴史的な研究との関連が明確でない、という点である。「も」は、元来終助詞・感動詞であったということが知られており(森野,1995)、この古代の用法は、詠嘆のモと強い関連を持っていると思われる。この関連がどのようなものであるかを明らかにする作業も今後の課題であると考えられる。

注

- 0 本論文は、中澤恒子氏、近藤安月子氏、工藤浩氏、坂原茂氏、金真喜氏、Ruchira Paliwadana氏、中溝朋子氏、龍美也子氏、國森信子氏、赤松弥生氏、そして査読者より大変貴重な助言を頂いた。記して感謝したい。
- 1 これ以降、実例の出典を（「」）に囲んで表現する。この記載がない場合はすべて作例である。
- 2 この論点は、田野村(1991)において明確に主張されていない。しかし、彼の詠嘆のモをSAPのモの一種として位置付けるとする主張は、暗にこのことを意味していると思われるので、ここでその問題点を指摘しておく。
- 3 詠嘆のモと「ものだ」の共起関係に注意を向けさせてくれたのは、金真喜氏と Ruchira Paliwadana氏との個人談話(1996)である。
- 4 この部分の議論は、査読者からのコメントに示唆を受けた。
- 5 以下の議論は、坂原茂氏との個人談話(1999)から示唆を受けた。
- 6 ただし、この主張は、「学生だ」、「女だ」、「プラスチック製だ」を文字どおりに解釈した場合にのみ成立する（龍美也子氏、國森伸子氏との個人談話(1999)）。「学生だ」を「学生のような振る舞いをする会社員だ」と換喩的に解釈すれば、詠嘆のモの読みが現れうる。このように換喩的に解釈した場合は、「完全に過去の信念を棄却する」とまでは言えないので、詠嘆のモが現れうると考えられる。また、査読者からも同様の指摘を受けた。
- 7 より形式意味論的な定義に関しては、畠山(1996)を参照。
- 8 この説明は、工藤浩氏との個人談話(1996)に依っている。
- 9 山田(1998)も同様の指摘をしている。

用例出典一覧

本論文で用いられた資料は、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』をテキストファイル化したものから採取した。以下、本稿で用いられた用例の出典をあげる。

『雪国』（川端康成）、『人民は弱し 官吏は強し』（星新一）、『青春の蹉跎』（石川達三）、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（村上春樹）、『破戒』（島崎藤村）、『路傍の石』（山本有三）、『護持院原の敵討』（森鷗外）、『野菊の墓』（伊藤左千夫）、『新源氏物語』（田辺聖子）、『黒い雨』（井伏鱒二）、『高野聖』（泉鏡花）、『かよい小町』（石川淳）、『越前竹人形』（水上勉）、『エディプスの恋人』（筒井康隆）、『友情上篇』（武者小路実篤）、『友情下篇』（武者小路実篤）、『二十四の瞳』（壺井栄）、『榆家のんびと』（北杜夫）

文献

- Gazder, Gerald (1979) *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical form*. Academic Press
- Grice, Paul (1975) *Logic and Conversation*. Peter Cole and Jerry Morgan (eds). *Syntax and Semantics, Vol. 3, Speech Acts*. Academic Press, New York
- 畠山 真一 (1996) 『「も」の動的意味論』修士論文 東京外国語大学
- Hirschberg, Julia (1985) *A Theory of Scalar Imprecature*. Ph.d dissertation. University of Pennsylvania
- Kay, Paul (1990) *Even. Linguistics and Philosophy* 13. 59-111.

- König, Ekkehard (1991) *The Meaning of Focus Particles*. Routledge.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, focus, and the mental representation of discourse referents*. Cambridge University Press.
- Levinson, Stephan (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- 益岡 隆志・田窪 行則 (1992) 『基礎日本語文法 一改訂版一』 くろしお出版
- 松下 大三郎 (1930) 『標準日本口語法』 中文館書院
- 森野 崇 (1995) 「古代日本語の「も」に関する先行研究の整理」 つくば言語文化フォーラム (編) 『「も」の言語学』 77-114 くろしお出版
- 永野 賢 (1951) 『日本語の助詞・助動詞-用法と実例』 国立国語研究所
- 中西 久美子 (1993) 「とりたて助詞「も」と含意」 『待兼山論叢日本学篇』 第27号 51-64 大阪大学文学部
- 野田 尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』 1-35 くろしお出版
- 野田 尚史 (1996) 『「は」と「が」』 くろしお出版
- 沼田 善子 (1986) 「取り立て詞」 『いわゆる日本語助詞の研究』 105-225 凡人社
- 沼田 善子 (1995) 「現代語の「も」」 つくば言語文化フォーラム (編) 『「も」の言語学』 13-58 くろしお出版
- Rooth, Mats (1985) *Association with Focus*. Ph.d dissertation. University of Massachusetts.
- Rooth, Mats (1992) A theory of Focus Interpretation. *Natural Language Semantics* 1. 75-116.
- 阪田 雪子 (1971) 「も」 松村明 (編) 『日本文法大辞典』 明治書院
- 佐久間 鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』 厚生閣
- 定延 利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」 益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』 227-260 くろしお出版
- 砂川 有里子 (1995) 「日本語における分裂文と語順の原理」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』 353-388 くろしお出版
- 高橋 太郎 (1978) 「「も」によるとりたて形の記述的研究」 『国立国語研究所報告62』 1-52
- 田野村 忠温 (1991) 「「も」の一用法についての覚え書き「君もしつこいな」という言い方の位置づけ」 『日本語学』 10 (9) 80-86
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 寺村 秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- Vallduví, Enric (1992) *The Information Component*. New York: Garland
- 山田 孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館

(投稿受理日: 2000年3月21日)

(改稿受理日: 2000年10月30日)

畠山 真一 (はたけやま しんいち)

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程2年

350-1124 埼玉県川越市新宿町5-13-38 新宿団地10-104

htk@tkb.att.ne.jp

On the so-called : implicative usage of *mo*

HATAKEYAMA Shin-ichi

Graduate student, University of Tokyo

Keywords

focus particle, topic, focus, scale

Abstract

It is a well-known fact that *mo*, which is one of the typical Japanese focus particles, has a so-called '*implicative usage*' in addition to other usages. The problem of what is the nature of the implicative usage of *mo* and how this usage relates to the other usages, however, is still unsettled though many proposals have been presented in the field of Japanese linguistics. To resolve this situation, I present a theoretical analysis on implicative *mo* supported with empirical evidence. The findings in this paper are summarized as follows: (1) implicative *mo* marks topics; (2) it indicates speakers' discovery or rediscovery of the unexpected events indicated by the sentences; (3) it is not only a topic particle but also a focus particle which focuses constituents followed by it. (1) is supported by the facts that implicative *mo* cannot follow NPs that denote unfamiliar things and that it almost always occurs in the subject position. (2) is evidenced by its collocation with amodal verb indicating speakers' surprise. (3) is concluded from (1) and (2). Based on these findings, I place this usage on the map of semantics of *mo* and explicate the intertwined *mo* usages.